

---

原 著 論 文

---

奇蹟の文法  
—ポール＝ロワイヤル修道院とジャンセニスム—

蔵 持 不三也<sup>a</sup>

Grammar of Miracles  
—Convent of Port-Royal and Jansenism—

Fumiya Kuramochi<sup>a</sup>

(<sup>a</sup>Faculty of Human Sciences, Waseda University)  
(Received : June 6, 2016 ; Accepted : July 26, 2016)

Abstract

On March 24, 1656, a ten-year-old daughter by the name of Marguerite Périer, who lived as a pensioner in the convent of Port-Royal of Paris, center on the Jansenism in France, was miraculously healed of cancerous ulcer in her left eye by touching a thorn taken from Christ's holy Crown. Persecuted Jansenists called this providential healing as "Miracle of Thorn" and insisted that it was a veritable seal of the grace of God who would celebrate their religious thoughts and activities. But the Jesuits, their rival, reproached it for deception using the name of God. It became the reason why Blaise Pascal, uncle of Marguerite, wrote his "Pensées", and also intensified the religious, political and social controversy between Jansenists or Port-Royalists and Jesuits who were supported by Archbishop of Paris and royal household. By an order of the King Louis XIV, the conflict resulted in abolition of the Convent of Port-Royal des Champs where sisters sent their religious life and the "solitaires", intellectual Jansenists, educated children in "Petites-Écoles (Small-schools)".

In general, almost every miracle should be placed in the "Triade of Miracles" who is constituted by 3 agents : miracle experient, witness and bishop of diocese. But it is only the bishop who can judge the miracle whether it was authentic or false, because he was qualified to do so at the Ecumenical Council of Trient (1545-63). A series of healing miracles thus must be considered not only as the subject of controversy in the context of above-mentioned conflict, but also as contestation or resistance against ecclesiastical system itself in France. Thus the Port-Royal has created, in addition of the famous Grammar by the solitaires, another grammar of resistance : "Grammar of Miracles".

**Key Words** : Miracles, Port-Royal, Jansenists, persecution, resistance

はじめに

それは1656年3月24日に起きた——。

四旬節最中のこの日、パリのある女子修道院の一室で、10歳の誓願修道女がキリストの聖棘冠に触れ、宿痼の涙癭炎が奇蹟的に治ったという。キリスト教

の長い歴史のなかで、奇蹟譚は無数にあるが、この奇蹟はとりわけ注目に値するものだった。この少女が、クレルモンの租税法院評定官の娘で、ブレーズ・パスカル（1623-62）の姪、つまりパスカル伝を書いた5歳違いの姉ジルベルトの娘マルグリト・

---

<sup>a</sup> 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)



図1 マルグリット・ペリエの奉納画。制作者不明。ポール＝ロワイヤル・デ・シャン博物館蔵

ペリエ (Parguerite Perrier, 1646–1733) だったというだけではない(図1)。16歳(1640年)に『円錐曲線試論』を発表し、19歳で機械式計算機を完成させた早熟の天才パスカルが、1654年の馬車からの転落事故を契機に、いわゆる「決定的回心」を体験したことはつとに知られているが、それには、2年前にポール＝ロワイヤル修道院に入った2歳下の妹で、詩人としてのちに名を馳せるジャクリーヌと、フランス・ジャンセニズムの霊的指導者だったサン＝シラン(後述)の影響があった。そのパスカルが、ポール＝ロワイヤルの母修道院にあたる、パリ南西部、ヴェルサイユ近郊のシュヴルーズの谷間にあるポール＝ロワイヤル・デ・シャン修道院(以下、デ・シャン修道院と表記する)付属のレ・グランジュ館で、ルイ・ド・モンタルの筆名を用いて書き始めた、ジャンセニズム<sup>(1)</sup>擁護の書、通称『プロヴァンシアル』の第5の手紙の4日後に起きた姪の奇蹟こそ、やがて『パンセ』(初版1669年)を執筆する上で重要な動機となったからである。

しかし、フランスの宗教史という枠組でみれば、このペリエの奇蹟は、フランス王権と結びついていたイエズス会士＝モリニストと、ガリカニズム(フランス教会独立主義)を標榜する「異端」ジャンセニストたち<sup>(2)</sup>との、いつ果てるとも分からぬ神学論争の真只中に位置づけなければならない。その母修道院ともども、ポール＝ロワイヤル修道院がまさにフランス・ジャンセニズムの牙城であり、聖俗両

権力に対する抵抗の場にほかならなかったからである。

本稿はこの奇蹟とデ・シャン修道院およびパリのポール＝ロワイヤル大修道院を巡って、17世紀から18世紀にかけてのフランス、とくにパリを中心として繰り広げられたもうひとつの「宗教戦争」を、一次史料や関連研究書に基づきながら考察すると同時に、そこに立ち現れる当時の社会状況をもあわせて検討するものである。それにはまず、この奇蹟の場となったポール＝ロワイヤル修道院の歴史を概観しておく必要があるだろう。

### ポール＝ロワイヤルの起源

パリのセーヌ左岸、いわゆるカルチェ＝ラタンの南端を東西に走る大通りがある。ポール＝ロワイヤル大通りである。この大通りとソルボンヌ方面から南下するサン＝ミシェル大通りが交差するあたり(121–125番地)、すなわち旧フォブール・サン＝ジャック地区にかつてポール＝ロワイヤル修道院があった(図2)。この建物は、フランス風古典主義建築で一世を風靡し、ルーヴル宮の改修やカルナヴァレ館(現パリ市立歴史博物館)の建設などを手がけた、建築家ピエール・レスコ(1515–78)が、1566年から69年にかけて建てたクラニー館を始まりとする。ピエールの死後、甥のレオン・レスコがこれを相続するが、彼は晩年の1624年、後述のデ・シャン女子修道院長メール・アンジェリク・アルノー、本名ジャクリーヌ・マリ・アルノー(1591–1661)に1500リーヴルで売却する。アンジェリクはこの建物を改築して、手狭になった原修道院のいわば分館とし、以後ここがパリのポール＝ロワイヤル修道院と呼ばれるようになる。だが、この建物自体はフラ



図2 旧ポール＝ロワイヤル修道院(現パリ市立コシャン総合病院、筆者撮影)



図3 デ・シャン修道院全景。18世紀初頭の油彩画、作者不詳。  
デ・シャン博物館蔵

ンス革命後の1793年にポール＝リーブル監獄（ルイ16世の国务卿などをつとめ、恐怖政治下の1794年に処刑されたマルゼルブラが投獄された）、95年に乳児（授乳）院、1814年に産院と助産師学校、そして1993年に総合病院へと幾度となく転身を遂げることになる。

今日、コシャン総合病院にポール＝ロワイヤル修道院の面影はほとんどなく、礼拝堂や列柱廊、あるいは参事会会議場などに辛うじてみてとれる程度であり、かつてここがフランス王国とキリスト教会を揺さぶったジャンセニスムの牙城であったことは、もはや遠い歴史の記憶となっており、当然といえば当然だが、道行く人や通院者がそれに気をとめる風はない。

それはさておき、ポール＝ロワイヤル修道院の歴史はパリのここではなく、デ・シャン女子修道院に始まる（図3・4）。以下では、前述したラシーヌの『ポール＝ロワイヤル略史』（1742年、死後刊行。以下『略史』と記す）とは別の角度から——記述に多少の重複が出るのは承知で——、この修道院の歴史を少し辿っておこう。



図4 デ・シャン修道院跡（筆者撮影）

シトー会最古の修道院のひとつとされるデ・シャン修道院は、フランスとイングランドの王家につながる血筋のマティルド・ド・ガランド（1224没）が、第4回十字軍に参加し、1204年、コンスタンティノポリスで没した夫（享年69）、すなわちマルリ領主のマチュー・ド・モンモランシないしマチュー・モンモラシ＝マルリから、その出発前に慈善活動用にと渡された資金で創設した小規模な女子修道院をはじめりとする。その建立には、ノートル＝ダム司教座聖堂を建立したパリ司教のウッド・ド・シュリ（1208没）<sup>(3)</sup>も与って力があつた。場所は、当時ラテン語のporregius、つまり「王（regis）の門（portus）」に由来するPorroisの地にあつたところから、ポール＝ロワイヤル（Port-Royal）と呼ばれるようになったとされる<sup>(4)</sup>。小修道院として出発したポール＝ロワイヤルは、1214年、新たなパリ司教によって修道院に格上げされる。そして、12世紀に創建された近隣のシトー会系ヴォー＝ド＝セルネ修道院の管轄下に置かれ、尊厳王フィリップ2世（在位1180－1223）や聖王ルイ9世（在位1226－70）などの援助を受けた。つまり、デ・シャン修道院は草創期からフランスの王権と教権に結びついていたことになる。

1216年から16年にかけて、最初期に移り住んだ12名の修道女たちはベネディクト会則を採用し、これにシトー会の会則を加えて日々の修行に励んだ。そしてラシーヌも書いているように、創設20年後の1223年には、時の教皇ホノリウス3世（在位1216－27）から、ミサ挙行の特権を得るまでになる。グレゴリウス9世によって教皇庁の庇護下に置かれた1230年には、パリ南西のヴィリエール＝バシュ、1479年にはその近くのビュクとシャトーフォール、さらに1504年にはビュロワイエに領地を獲得し、15世紀中に得たパリ南東の領主領モンドヴィルやその後も次々を増やしていった領地も含めれば、具体的な数値は不明だが、地代の収入は莫大なものとなっただろう。

こうして修道院は順調に発展し、16世紀には半径8キロメートルに広大な農地や森林を有するまでになり、パリ盆地でもっとも裕福な修道院とまで言われるようになる。ただ、湿気が多く、健康に適さない場所柄やそれゆえの度重なる疫病、修道女たちの信仰の希薄化など、前世紀からの宿痼になお苦し



んでいた。1516年、教皇レオ10世とフランス王フランソワ1世のあいだで結ばれたボローニャ協約は、国王にフランス国内の司教や（女子）修道院長の任命権を認めたものだが、デ・シャン修道院では、「ポール＝ロワイヤルの貴婦人たち」と称された修道女たちが、その後も独自に修道院長を選んだ。だが、こうした財政的な豊かさとは裏腹に、いやむしろそれゆえにこそ、修道院内に戒律の乱れが起こる。そこで1558年から74年にかけて修道院長をつとめたカトリヌ・ド・ラ・ヴァレは、組織や風紀の改革を意図するが、シトー会への従属を再三拒否したため破門されそうになり、宗教戦争を機に逐電してしまう。そのあとを受けたのは、彼女の姪のジャンヌ・ド・ブルアールだった。

### メール・アンジェリク

ナントの王令が出された1599年、パリ高等法院弁護士アントワヌの次女で、のちに名前と天使(アンジュ)をかけて「メール・アンジェリク」と呼ばれるようになる、誓願前の修練女アンジェリク・アルノー(1591-1661)が、わずか8歳(!)でジャンヌ・ド・ブルアール修道院長の補佐に抜擢される(図5)。むろんそれは、パリの有名な法曹一族であったアルノー家が、ポール＝ロワイヤル修道院の経済的な後ろ盾となっていたためである。アンジェリクの姪で、1678年から病没する84年までこの修道院長をつとめた、アンジェリク・ド・サン＝ジャン・アルノー・ダンディイ(1624-84)による『メール・

アンジェリク・ド・サント・マドレーヌ・アルノー師の生涯に関する報告』(死後刊行。ただし、刊行地は未記載)によれば、パリ高等法院検事の祖父マリオンが、国王アンリ4世から勅許状を得て押し込んだという<sup>(5)</sup>。

当然のことながら、この説は、1742年にユトレヒトで刊行された同じ著者(ただし匿名)による、『ポール＝ロワイヤルの歴史とこの修道院の改革者メール・マリ・アンジェリク・ド・サント・マドレーヌ・アルノー師に供するための回想録』にも、そのまま採録されているという(筆者未見)。アンリ4世がマリ・ド・メディシスと再婚した1600年、少女は、この国王の愛妾ガブリエル・デトレの姉アンジェリクが院長をしていた、パリ北西郊モービュイソンの女子修道院に移って聖職者となるべく訓育され、翌年、堅信の秘蹟を受けてアンジェリクの名を与えられる。こうして2年後の1602年、死去したブルアールのあとを受けて、ポール＝ロワイヤル修道院長になる。修道女12人たらずの修道院とはいえ、おそらく史上最年少の院長の誕生である。同年9月、シトー会修道院長から祝福と初聖体拝領を受け、300人あまりが列席したとされるその式には、モービュイソン修道院長の姿もあった。しかし、たかだか11歳になるかならぬかの少女である。遊びたいのを必死にこらえても、幼い使命感を発揮する以上のことはできなかっただろう。加えて、年間の収益が6000リーヴル足らずとなっていた修道院の財政問題にも直面しなければならなかった<sup>(6)</sup>。

あるかあらぬか、1607年7月、重い熱病に罹った彼女は、12月までパリの自宅での療養を強いられる。以後、彼女は身体的な問題にたえず悩まされることになる。翌1608年、17歳になった彼女は、「神の手が自分に触れて修道女になる」という喜びに満ちた「啓示」を得て、いよいよ修道院の改革に乗り出す。手始めに、シトー会士クロード・ド・ケルセイユーを霊的指導者に迎えて、シトー会の戒律を遵守するよう修道女や修練女たちに命じた。修道院の財産も共有化する<sup>(7)</sup>。しかし、カトリックの神秘家でジュネーヴ司教でもあったフランソワ・ド・サル(1567-1622)が、有名な『信仰生活への導き』を著した1609年の9月、修道院を揺るがす大事件が起きる。皆が食堂にいたとき、豪華な4輪馬車が囲い地の外に着く。中から降りて来たのはアンジェリクの父親



図5 メール・アンジェリク。フィリップ・ド・シャンペーニュ画、制作年不明。デ・シャン博物館蔵

アントワヌだった。いつもならただちにギシェ（小門）が開くはずだった。ところが、娘はそうさせなかった。父親は開けるよう主張し、責め立て、命じ、憤り、次第に強く扉を叩きだしたが、娘は頑としてそれに応じなかった。弱冠18歳の修道院長が自ら範を示したこの「<sup>ジュルネ・デュ・ギシェ</sup>ギシェの日」<sup>(8)</sup>と呼ばれる事件以後、修道院は世俗との分離をより鮮明に打ち出すようになる。これもまたメール・アンジェリクによる改革のひとつだった。フイヤン派（シトー会の改革修道会）で、ソルボンヌの博士だったウスタシュ・ド・サン＝ポール・アスリヌ（1575－1640）らを、修道院の霊的指導者として招いたのもこの年だった（図6）。

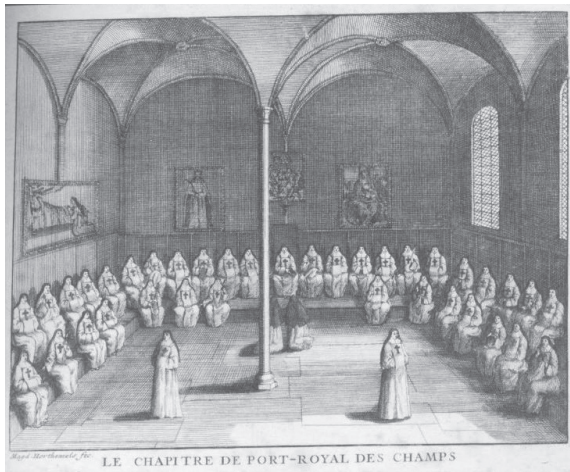


図6 デ・シャン修道院の女子修士会。マドレーヌ・オルトメル（1686－1767）作版画、1710年。デ・シャン博物館蔵

1613年、メール・アンジェリクは再び大病を患う。だが、改革の意志はなおも固く、ノストラダムス終焉の地であるサロン＝ド＝プロヴァンスに生まれ、ルーアンの説教師から、のちに王太后マリ・ド・メディシスの聴罪司祭を26年間つとめ、1627年には外国宣教会の支持母体となる聖体会を立ち上げる、高名なイエズス会士（！）のジャン・シュッフラン（1571－1641）を招いて、修道院の霊的指導を新たに委ねている。彼は以後12年ものあいだ、この任を請け負うことになる。メール・アンジェリクはまた、アンシャン・レジーム最後の全国三部会がパリで開かれた翌1614年、修道院内での肉食を全面的に禁止して、四旬節の厳しい齋戒を日常化してもいる。さらに1615年には、前年に聖母訪問修道会（女子サレジオ会）を創設したばかりのフランソワ・ド・

サル（1567－1622）と出会い、改革への意見を求めている。おそらくこうした一連の改革が成功したのだろう、アンジェリクは30年戦争が始まった1618年から23年まで、のちにカトリックの教会博士と呼ばれるようになるフランソワ・ド・サルの慫慂もあって、古巣ともいべきモービュイソン修道院の改革も行う。

そしてリシュリユーが実質上の宰相となって実権を掌握した翌1625年、アンジェリクは、80人とも120人ともいわれる多くの修道女を抱えて修道院が手狭になったため、そしておそらく沼沢地にあったポール＝ロワイヤル修道院内でマリアがはやったため、前述したように、パリのフォブール・サン＝ジャック地区にクラニー館を購入する。シトー会の修道院長とパリ大司教の認可も降りた。こうして彼女はデ・シャンの修道女24人（ないし14人）とこの邸館に移り、これを修道院として、その初代修道院長も兼任する。以後、この修道院は「パリのポール＝ロワイヤル」、シュヴルーズ峡谷のそれは「ポール＝ロワイヤル・デ・シャン（田園のポール＝ロワイヤル）」と呼び分けられるようになる。

ラ・ロシェルの和約によってプロテスタントが国王と和解した1626年、このパリの修道院はシトー会とパリ大司教の管轄下に入る。一方、デ・シャン修道院の方は、ミサを挙げる院長代理と下僕を残して、一時的に俗世を離れた生活をしようとする男たちに開放した。多くが貴族や富裕階級の出であった彼らは、禁欲と貧者への喜捨、農作業などで日々を送り、1637年頃からソリテール（隠修士）と呼ばれるようになる。特定の宗派に属することはなかったが、やがてこのソリテールたちが、フランス国内におけるジャンセニスムの普及に大きな役割を担うようになる。そのなかには、たとえばアンジェリクの甥で、最初のソリテールとされる弁護士のアントワヌ・ル・メーストル（1608－58）や、デ・シャン修道院長をつとめた叔母の口利きで移り住んだ神学者のピエール・ニコル（1625－95）、さらにアンジェリクの長兄で詩人・作家・翻訳者、そしてマザリナド（マザラン風刺詩）の書き手として名をなしながら、マリ・ド・メディシスの寵を得て國務評定官となり、デ・シャン修道院で没したロベール・アルノー・ダンディイ（1589－1674）、その弟で、のちにジャンセニスムの中心的人物のひとりとなる、「グラン・



アルノー」ことアントワヌ・アルノー（(1612-94、後出）もいた。

マルセイユやブルゴーニュ地方でパストが流行した1629年から、アンジェリクは院長職を同輩から選ばれた修道女が3年任期でつとめることにする。こうして翌30年、アンジェリクは修道院の副院長だった妹のアニエス・ド・サン＝ポール・ド・アルノー（1593-1671）、聖職名メール・アニエス（1593-1672）ともども職位を辞す。後任に選ばれたのは、自らがモンビュイソンの修道院長に任じていた、マリ＝ジェヌヴィエーヴ・ド・サン＝トーギュスタン・ル・タルディフ（生没年不詳）だった。そして1633年には、師のラングル司教セバスチャン・ザメ（1588-1655）とともに、聖体修道会を立ち上げる。マリ・ド・メディシスの聴罪司祭でもあったザメは、フランソワ・ド・サルが1622年に没したあとを受けて、パリのポール＝ロワイヤル修道院で霊的指導者となり、のちにラングルの神学校をオラトリオ会に委ねて、ジャンセニズムを司教区内に広めた人物でもあった。

### サン＝シランと「小さな学校」

1635年、修道院はかねてよりアルノー家と親交があったジャン・デュヴェルジュ・ド・オーランス、というより、むしろ彼が院長をしていた修道院の名をとって、サン＝シラン（1581-1643）と呼ばれる人物を霊的指導者に迎える（図7）。まさにこの人

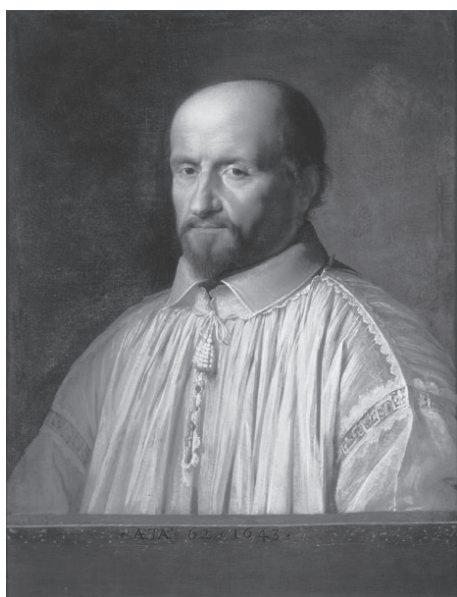


図7 サン＝シラン肖像画。制作者、制作年不明。デ・シャン博物館蔵

物こそが、ルーヴェン（ルーヴァン）大学以来の盟友だったオランダの神学者コルネリウス・ヤンセン、ラテン語名ヤンセニウス（1585-1638）の神学思想、つまりジャンセニズムのフランスへの紹介者でもあった<sup>(9)</sup>。サン＝シランはまた、1620年、フランスにカルメル会を招来し、自らその修道院長をつとめ、晩年近くに枢機卿になるピエール・ド・ベリュル（1575-1629）と親交を結び、その教えに傾倒している。イエズス会の神学校に学びながら、モリニスト＝イエズス会の恩寵論を批判したベリュルのサン＝シランへの影響は、ヤンセニウス以上のものがあったとされるが、のちにその死を契機として200例以上の奇蹟が生まれることになる、ジャンセニスト＝上訴派の助祭パリス（註42参照）が、聖職者への決定的な一步を踏み出した聖マグロワール神学校は、このベリュルがパリで創設したオラトリオ会に属していた。

サン＝シランとの深い結びつきによって、ポール＝ロワイヤルは過たずジャンセニズムの拠点となっていく。だが、ジャンセニズムが真に根づくようになるには、メール・アニエスが修道院長となって2年後の1638年（ないし37年）、パリのポール＝ロワイヤル修道院に近いキュル＝ド＝サック・サン＝ドミニク通り（現ロワイエ＝コラル袋小路）にあったものとは別に、デ・シャン修道院が丘の上のグランジュに設けた、<sup>プチイット＝ゼコル</sup>「小さな学校」（Petites-Écoles）の活動をまたなければならない（図8）。サン＝シランの懇意を受けてその校長になったのは、パリのヴァンサン・ド・ポール（1581-1660。1737年列聖）が営む捨て子院（慈善院）で修道士として働き、のちにサン＝シランの弟子となったジャンセニストのアントワヌ・サングラン（1607-64）である。1639年には、ジャンセニストの弁護士で、パリのポール



図8 デ・シャンの旧「小さな学校」校舎（筆者撮影）

＝ロワイヤルでサン＝シランの指導を受けていたアントワヌ・ル・メートル（1608－58）が、前年に師が逮捕されてヴァンセンヌ城の監獄に幽閉されたため、弟や子供たち、さらにこの「小さな学校」で教鞭をとることになるソリテールたちと一緒に、グランジュの農家に移り住んだ。「小さな学校」では、ほとんどがサン＝シランと何らかの繋がりを持つ家の子弟からなる少人数の生徒たちに、早朝5時半から夕刻まで歴史や地理、ラテン語の詩、文法、さらにギリシア語などが、フランス初の「教科書」を用いて教えられた<sup>(10)</sup>。

ただ、ソリテールたちはそこで学者や宮廷人のような礼儀作法を弁えたオネットムを育成するのではなく、信仰心の涵養を本義とするサン＝シランの方針に沿って、世俗的な「学」を追放し、イエズス会系の学寮が認めていたダンス教育や悲劇の上演も認めなかった。イエズス会がラテン語で教育したのに対し、「小さな学校」はフランス語でそれを行った。ときに1000名を超える生徒を擁する各地のイエズス会の初等学校と異なり、それは名称のとおり少人数での教育を目指した。つまり、この学校は当初からイエズス会系の教育と差別化を図っていたのだ。最初期の教師陣＝ソリテールには、『論理もしくは思考法』（1662年）を著したピエール・ニコラのほか、アントワヌ・アルノーと共著で有名な『ポール＝ロワイヤル文法』（1660年）を上梓した文法家のクロード・ランスロ（1615－95）も、ある時期からそれぞれ哲学とギリシア語・数学を講じた。

しかし、当然のことながら、この学校はイエズス会の反感を煽った。パリ大学はさておき、それまで良家の子弟教育をいわば一手に引き受けていたイエズス会の影響力や信用に対する、あからさまな挑戦と思われたからである。加えて、サン＝シランはイエズス会の道德教育が倫理的・宗教的に墮落していると舌鋒鋭く批判していた。そのため、彼はヤンセンがイーペルの司教に叙されて2年後、問題の書『アウグスティヌス—人間の本性の健全さについて』を脱稿し（1640年死後刊行）ペストに罹って没した1638年、旧友だったリシリュエ枢機卿の命により異端の罪で逮捕され、バステューユ監獄（ヴァンセンヌ城とする説もある）に幽閉される。権謀術策を駆使して政治の実権を握ったこの枢機卿は、すでにその栄達を支えてくれたカトリック至上主義者の

ベリユルを王権拡張の妨げとして退けており、1637年には、ルイ13世の聴罪司祭で、政敵の王太后に同心していたとしてイエズス会士のニコラ・コーサン（1583－1651）を追放してもいた。

そんなリシリュエが没して2カ月後、そしてルイ13世が没してルイ14世が即位する3ヶ月前の1643年2月、サン＝シランは前記アルノー・ダンディイらの働きかけで釈放される。だが、長年の入牢生活で心身ともに衰弱していた彼は、数カ月後に不帰の客となる。享年62。辛うじて救いとなったのは、彼のジャンセニスムへの想いを、毎日のように牢を訪れてくれたダンディイが受け継いでくれたことだった。のちにアウグスティヌスの『告白』（1649年）や、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代史』（1667年）などの翻訳を行うことになる彼が、1642年、北仏ルーアンのブレーズ・パスカル宅で、ヤンセンの100頁あまりの『内的人間改革論』も仏訳し、終焉の地となるデ＝シャン修道院のソリテールとして、85歳の天命を全うするまで、ジャンセニスムを支える重要な役割を担うようになるからだ。さらに1643年には、後述するように、その末弟であるアントワヌ・アルノーがジャンセニスムの普及を狙い、迫害を招くことになる『頻繁な聖体拝領』も出ている。サン＝シランの思想はこうして確実に継承されていった。

修道院に戻ろう。『ポール＝ロワイヤル修道院規程』を定めたメール・アニエスは、1642年、修道院長の座を姉のメール・アンジェリクに譲る。再び院長となった後者は、1651年にその職を最終的に辞すまで、デ＝シャン修道院の再建につとめる（図9）。おそらくその一環なのだろう、王権の拡大を抑えよ



図9 デ＝シャン修道院での施物分配。マドレーヌ・オルテメルの想像画、制作年不明。デ＝シャン博物館蔵

うとした高等法院による、いわゆるフロンドの乱が起きる前年の1647年、彼女は修道女の着衣を変えている。それまで黒いスカプラリオ（肩衣）とシトー会系の頭巾付き外套をやめ、白い羅紗の外套と赤い十字架がついた白いスカプラリオを正服としたのだ。同じ年、メール・アニエスが初代パリ大司教のジャン＝フランソワ・ド・コンディ（1584－1655）から、ポール＝ロワイヤルの修道女数人をデ・シャンに移す許可を得ると、翌年には彼女もまた9人の修道女を連れてデ・シャンに戻る。

これに伴って、ソリテールたちはデ・シャンの修道院を去り、森に囲まれた近くのグランジュの建物に移り、この地で新たな「小学校」を出立させる。貴族と民衆によるフロンドの乱が起きる前年の1649年末には、前述のアントワヌ・ル・メートルの弟で、神学者のルイ＝イサク・ルメートル・ド・サシ（1613－84）が、デ・シャン修道院の司祭に叙され、修道女や1652年に校舎の新築になった「小さな学校」<sup>(11)</sup>の子弟たちの聴罪司祭をかねるようになる（人文主義者でもあった彼は、1650年、『ポール＝ロワイヤル時祷書』を編み、バステュー投獄中の1667年にウルガタ版を底本として、新約聖書の仏訳版、いわゆる『ポール＝ロワイヤル聖書』を完成させてもいる）。その子弟のなかには、父の死後、身を寄せていた祖父が亡くなったのを機に、1649年、10歳でこの学校に入ったジャン・ラシーヌもいたはずだ。おそらく彼の入学に際しては、デ・シャンの修道女だった叔母の勧めがあったのだろう。1653年にグランジュを去った彼は、55年に再入学してギリシア語やラテン語、修辞法などを学んだ。だが、1666年、彼は旧師ピエール・ニコルが自作を中傷誹謗したとして、ポール＝ロワイヤル反駁の詩を書いている。詳細は不詳だが、明らかにこの事件によって、そして何よりも「小さな学校」、いやポール＝ロワイヤル修道院自体が禁じていた演劇の道に入ったことによって、ラシーヌはこの修道院と袂をわかった。これにより、修道院のみならず、フランスのジャンセニズムもまた、不幸にして強力な理論家ないし実践家をひとり失ったことになる。

#### クム・オカジオーネ（Cum occasione）

前述したように、1648年から53年まで、パリは一連のフロンドの乱の戦場と化す。デ・シャン修道

院もまたこの乱と無縁ではなく、周辺住民に紛れて、反乱軍の一部も修道院に逃げ込んだ。ソリテールたちは彼らを守ったが、むろん国王軍に攻め込まればひとたまりもなかっただろう。こうして1652年、デ・シャンの修道女50人あまりは、メール・アンジェリクともどもパリに移らざるをえなくなる。そのなかに、この年の1月、デ・シャン修道院に入り、5月に修道誓願をしたパスカルの妹ジャクリーヌもいたはずだ（兄と同じクレルモンで生まれた彼女は、デ・シャン修道院で没している）。

デ・シャン修道院とグランジュには20人ほどのソリテールが残った。幸いなことに、ルイ13世の寵臣で、かねてよりソリテールたちとも親交があったリュイヌ公ルイ＝シャルル・ダルベール（1620－90）が、1652年、修道院の領地内にヴォーミュリエ城館（現国立ポール＝ロワイヤル・デ・シャン博物館）を築き、ソリテールや児童たち（ブレーズ・パスカルやラシーヌを含む）を受け入れてくれた<sup>(12)</sup>。この公爵はデカルトの著作をはじめラテン語に訳した知識人で、「ポール＝ロワイヤルのムッシューたち」、すなわちソリテールたちによる新約聖書のフランス語訳にも助力を惜しなかった。

サン＝シランが出獄してまもなく世を去って10年後の1653年、ガリレイを宗教裁判にかけたこと（1633年）でも知られるウルバヌス8世（在位1623－44）の後任教皇インノケンティウス10世（在位1644－55）が、教勅「クム・オカジオーネ（現下の状況について）」を發布して、前教皇が10年前に禁書としたヤンセンの『アウグスティヌス』に、異端的な「5命題」が含まれるとして改めて断罪する。この「5命題」とは、フランスの反ヤンセン派司教たちが『アウグスティヌス』からジャンセニズムの攻撃材料として抽出したもので、彼らはこれを教皇に提示し、その断罪を要請した。その内容は概ね以下の通りである。① 神の律法のあるものは、たとえ義人が自力によってそれを守ろうと望みかつ努めても、守ることができない。律法を全うする恩寵も彼らに欠けている。② 本性が墮落した状態では、内的恩寵に決して抗いえない。③ 本性が墮落した状態では、ある行為が功德ないし罪に値するためには、人間にとって必然性を持たぬ自由は必要とされず、強制がない自由だけで十分である。④ 半ペラギウス派は、個々の行為、そして信仰の始まりに対してさ



え、先行する内的恩寵の必要性を認めていた。しかし人間の意志がこの恩寵に抗うことも従うこともできると主張したがために、彼らは異端であった。⑤キリストは例外なく万人のために死んだとか血を流したというのは、半ペラギウスの異端である<sup>(13)</sup>。

この断罪に対しては、ジャンセニスト陣営から5命題自体は異端として認める（法問題）ものの、それが『アウグスティヌス』には見いだせない（事実問題）とする異議申し立てがなされる。一方、モリニストたちは、この5命題批判を支持した。翌1654年3月、枢機卿マザランはルーヴル宮で高位聖職者会議を開く。会議を仕切ったのは、イエズス会が経営するパリのリセ・ルイ・ル・グラン院長で国王の聴罪司祭もつとめていたフランソワ・アンナ（1590－1670）だった。やがてジャンセニスト最大の敵となり、後述するように、パスカルとも応酬することになるイエズス会士である。同会議は5命題がヤンセンのものだとして教勅の受け入れを決める。マザランはその決議を教皇に報告する一方、国内の全聖職者に署名を課そうとした。だが、ローマからの独立とフランス教会の独自路線を唱えるガリカニスム<sup>(14)</sup>の擁護者をもって自任する高等法院の反対で、その目論見は成就しなかった<sup>(15)</sup>。これにより、5命題問題は決着したかにみえた。

しかし、1655年、モリニスト＝イエズス会士たちはソルボンヌの神学教授アントワヌ・アルノー（前出）を、「5命題」を認めない異端だとして大学に告発し、翌1656年1月、アルノーは意見を同じくする他の10人あまりの博士ともども大学を迫られる<sup>(16)</sup>。パスカルがルイ・ド・モンタルの筆名で『プロヴァンシアル』第1の手紙を発表し、アルノーを擁護してイエズス会を攻撃したのは、この追放劇から10日後の1月23日のことだった。だが、その支援も功を奏さず、アルノーは2年後、教皇クレメンス9世による「教会の平和」によってルイ14世の重用されるまで、パリの隠れ家に逼塞しなければならなかった。

この追放劇の前年（1654年）、メール・アンジェリクは再びデ・シャン修道院長を辞し（パリのポール＝ロワイヤル修道院長は1671年までつとめた）、後任には、1615年にデ・シャンに来て修練女となり、のちにモービュイソンの女子修道院長となったマリ・デ・ザンジュ・シュイロー（1599－1658）が選ばれる。ただ、この新任の院長は任期が終わる1657

年までパリのポール＝ロワイヤル修道院にいて、一度もデ・シャンに足を入れることがなかった。病弱な身体がデ・シャンまでの馬車旅を許さなかったからである。

そして波乱の1656年。アルノーがソルボンヌを追われて2か月後、デ・シャンのソリテールや「小さな学校」の教師たち、さらに生徒たちまでもが、イエズス会の要請を受けた国王の命で、デ・シャンを去らなければならなくなる。本論冒頭で紹介したマルグリト・ペリエの聖荊冠の奇蹟は、まさにそうしたポール＝ロワイヤルおよびジャンセニスムの危機的状況のなかで起きた僥倖といえるだろう。ジャンセニストの神学者ニコラ・ル・グロ（1675－1751）は、匿名の書『教勅ウニゲニトゥスに先立って生じた、もしくはそれに続いて起きた主な出来事にかんする略史』において、この奇蹟がパリの司教総代理の書簡によって認められ、ポール＝ロワイヤル修道院を取り潰そうとする策謀を一時沙汰止みにしたとしているからだ<sup>(17)</sup>。

## 奇蹟の風景

ラシーヌの『略史』によれば、ペリエに奇蹟的な快癒をもたらした聖荊冠は、じつはラ・ポトゥリという高位聖職者が収集した聖遺物のひとつ（ただし、聖荊冠の荊棘1本！）で、1656年の四旬節の第3金曜日にあたる3月24日に、ポール＝ロワイヤル修道院に貸し出されていたという<sup>(18)</sup>。ラシーヌに言及はないが、このピエール・ロワ・ド・ラ・ポトゥリ（1586－1670）はアルノー家の親族で、サント＝ジュヌヴィエーヴの丘にあるサン＝ジャック＝デュ＝オー＝パ教会の前に住んでいた。ジャンセニストの作家・神学者で、ド・サシラのソリテールたちとも親交があり、ポール＝ロワイヤルに入って5年目の1669年にバステューに投獄されているニコラ・フォンテーヌ（1625－1709）によれば、あろうことかラ・ポトゥリは、マリ・ド・メディシスのために、サント＝シャベル礼拝堂に保管されていた聖荊冠から荊棘を2本引き抜いたというのだ<sup>(19)</sup>。現在、シテ島の最高裁判所内にあり、ステンドグラスで有名なこの礼拝堂は、1248年に建立されているが、それは聖王ルイ9世（在位1226－70）が、コンスタンティノポリスの最後のラテン皇帝ボードゥアン2世（在位1228－61）から購入した聖荊冠を、他の聖十字架

の聖遺物とともに安置するためだった。むろんこれらの聖遺物が真正のものだったかどうかは不明とするほかない。ただ、ルイ13世の母后マリ・ド・メディシスが宰相リシュリュー枢機卿（1585－1642）との権力闘争に破れて1631年にブリュッセルに亡命していることからすれば、ラ・ポトゥリによる荊棘の抜き取りは当然それ以前になされたことになる。

それにしても、抜き取った荊棘の1本は彼が保管していたとして、もう1本の荊棘は母后の手元にあったのだろうか。いささか気にかかるところであるが、ともあれその彼が聖遺物を修道院に安置した日に、ペリエの奇蹟が起きたというのだ。ポール＝ロワイヤル修道院長のメール・アンジェリクは、当時修道院が置かれていた状況に鑑みて、奇蹟が噂にならないよう修道女たちに箝口令を敷いたが、数日後には外科医たちが診察に来てペリエの奇蹟的な快癒を確認し、その驚きを喧伝した。やがて噂は王太后（アンヌ・ドートリシュ）の耳にも入る。外科医たちの証明書がにわかには信じられなかった彼女は、国王の首席外科医を修道院に派遣して、ことの真実を調べさせた。報告の内容は予想に反して「神の御業」を裏付けるものだった。パリの司教総代理もまた数名の医師の証明書やソルボンヌの有力な神学者たちの意見を聴取し、最終的に奇蹟が真実であるとの裁定を下し、「金曜日ごとに聖なる茨の聖遺物がポール＝ロワイヤルの御堂に陳列されて、信者に拝ませる」ことにしたともいう<sup>(20)</sup>。

周知のように、トリエント公会議（1545－63年）は、各地で数多く報告される治癒奇蹟に対応するため、当該地区を管轄する司教に対し、3人以上の医師や外科医、調剤師によって当事者の症状を診断させ、奇蹟が真正なものであるかどうかを判断するよう定めている。ペリエの奇蹟もまたそれに倣って、医師たちの調査を受けたわけである。その医師団のなかには、王立医学校の教授で国王の筆頭侍医でもあったシャルル・ブヴァール（1572－1658）もいた。そして彼らは、ソルボンヌの神学者たちとともに、ペリエの快癒が奇蹟によるものとの報告書を作成する<sup>(21)</sup>。そして奇蹟から2ヶ月以上経った1656年6月8日、パスカルがパリの宗教裁判所に届け出て、姪の奇蹟は正式に承認される<sup>(22)</sup>。おそらくそれからまもなく、ジャクリーヌ・パスカルはこの姪の奇蹟を詩のなかで取り上げている。

(・・・・・・・・・・)

こうして過酷な季節の冬にもかかわらず、  
1本の木が聖なる館の中で花を咲かせる。  
私たちはその驚くべき出来事に希望を見出した。  
そして、誤りでしかない夜の夢を見ながら、  
眠りが休息に甘んじているとき、  
真実があなたの下女に現れた<sup>(23)</sup>。

編者によれば、この詩句は、前年の冬にパリのポール＝ロワイヤル修道院の庭園に立っていた木が花を咲かせたことを受けて書いたものとしているが、むろんそこにはマルグリットの奇蹟が暗示されているはずだ。しかし、彼女の奇蹟はポール＝ロワイヤルにとって、単なる僥倖にはとどまらなかった。反マザラン派のアルノー・ダンディイ（前出）もまた、隠棲の地ポンポンヌで編んだ『回想録』（1667年）のなかで、自らがまじかで確認したであろうこの奇蹟について次のように記している。

（1656年5月5日にソリテールの生活に戻ったことに同意する仇敵のマザラン枢機卿からの書状を受け取るより1ヶ月以上前の）1656年3月24日、神はパリのポール＝ロワイヤルで聖荊冠によって偉大な奇蹟をなし、以後、多くの奇蹟がそれに続いた(・・・)。これらすべての奇蹟は清純無垢な修道女たちのために神が発する天上の声と同様、彼女たちの仲間を慰め、何よりもその敵対者たちを驚かせた。(・・・) イエズス会士たちは公の、だがスキャンダラスな文書によって、こうした奇蹟が偽りであると躍起になって信じ込ませようとした<sup>(24)</sup>。

ダンディイの指摘にあるように、ポール＝ロワイヤルの奇蹟は敵対勢力であるイエズス会にとっては座視できない出来事だった。ジャンセニストたちがペリエの奇蹟を神が彼らの主張を嘉する証として喧伝したからである。やがてマルグリットは生地クレルモン＝フェランのオテル＝デュー（慈善院）で院長をつとめるようになるが、当然のこことながらイエズス会士たちはこの奇蹟を何とか否定しようと躍起となった。その先陣にたったのが、五命題弾劾で活躍したフランソワ・アンナ（前出）である。彼は

おびただしい数のジャンセニスム反駁文を、さながら何かに憑かれたかのように量産している。たとえば、『ポール＝ロワイヤルの秘書が復活祭以降に広めた手紙にみられる、さまざまな著者に引用されたジャンセニストたちの善意』という、一見ジャンセニスムを賞賛するような題名——むろん冒頭にある「ボンヌ・フォイ Bonne foi (善意)」とは皮肉である——の序文で、彼は次のように書いている。

私は奇蹟の真贋を議論したりはしない。とくにこれらの奇蹟がジャンセニスムをまったく疑問視しない人物たちによって認められ、正当化されている場合はなおさらのことである。思うに、奇蹟は信じなければならない。私が問題とするのは、彼ら（ジャンセニスト）たちがこの信仰を利用しようとする点であり、断罪された教義がじつは真なるものであることを示そうと、奇蹟を取り上げ、方向づけようとする点なのである。こうした意図はきわめて無謀かつ破廉恥な振る舞いであり、懲罰に値する（括弧内蔵持。以下同）<sup>(25)</sup>。

おそらく問題の奇蹟の吟味が終わってまもなく編まれたと思われるこの書は、本文で「ポール＝ロワイヤルの秘書」、つまりパスカルの手紙を批判している。さらに1657年、アンナは『さまざまな奇蹟にかかわるカトリックの真理の擁護、「ポール＝ロワイヤルで起きたとされる聖荊冠の出来事に関する不可欠な観察」と題された文書に対する、ポール＝ロワイヤル諸氏の返答の偽装と詐術への反論』という、相変わらず長い題名の小冊子で、次のように断罪している。

たしかに、これら（ポール＝ロワイヤルの修道院の）関係者たちのだれかがこの聖荊冠を手にとって人々に見せ、病人たちに触れさせようとするなら、信仰の秘密のなかで、内的に語るイエス・キリストの声を聞かなければならない。それはこう語りかけているはずだ。「想い出しなさい。汝が手にしている荊冠こそ、汝の傲慢さと不服従を宥すために我が頭に突き刺さったものであり、この荊冠による傷から流れ出た血は、汝を救うため、人々を、すべての人々を救うためにある」<sup>(26)</sup>。

パスカルがデ・シャン修道院付属のレ・グランジュ館で書き始めた『プロヴァンシアル』（1656—57年）<sup>(27)</sup> は、まさにこの出来事の前後に編まれたもので、当然そこにはアンナへの批判が盛り込まれている<sup>(28)</sup>。『プロヴァンシアル』に繰り返し登場する——当然、批判の対象として——アンナは、こうして聖荊冠の奇蹟が神の祝福では決してなく、神が異端ジャンセニスムを放棄するよう論じた証だと難じるのだ。さらに、この奇蹟をとりあげたアニエス修道院長の『聖なる奇蹟の祈り』を「イエス・キリストにそむく陰謀の最初の産物」とまで切って捨てる。これに対し、パスカルは1656年12月4日日付の「第16の手紙」のなかで、多少とも控えめに反撃している。「このきよらかなおとめたちが、その定めに従って日夜、聖なる秘蹟に宿りますイエス・キリストを礼拝しているあいだも、あなたがたは、日夜、彼女たちがイエス・キリストは聖体のうちにも、父なる神の右にもいまさぬと信じているのだとふれまわってやまないのです」<sup>(29)</sup>。

こうしたパスカルの『プロヴァンシアル』をアンナに対する反論と対比して分析すれば、それだけで興味深い研究となるだろうが、1657年、イエズス会にとっては想定外の、そしてポール＝ロワイヤルとジャンセニストたちにとっては願ってもない奇蹟が起きる。その人物は、ルイ13世の寵臣でフランス同輩衆としてより、むしろデカルトのラテン語原文による『省察』（1641年）の最初の仏訳者として知られる、ルイ＝シャルル・ド・リュイヌ公（1620—90）の執事だったリシェなる弁護士。主人はソリテールたちと親交をもち、「ポール＝ロワイヤルの紳士たち」の新約聖書の翻訳作業にも加わり、さらにデ・シャン修道院近くにヴォーミリエ城を築き、パスカルや「小さな学校」時代のラシーヌたちを住まわせるほどのジャンセニスト（ないし支持者）だった。にもかかわらず、そして娘がデ・シャンの寄宿生だったにもかかわらず、リシェは妻の反対を押しつけて、前記アンナや王妃の聴罪司祭たちとポール＝ロワイヤルの弾劾書を作成していた。そんなリシェを改心させようと、娘と妻は聖荊棘に9日間祈祷を行った。その最終日のことだった。いつものように勤めのために家を出た彼は、100歩も行かないうちに突然激しい頭痛に襲われ、高熱も発症する。地面を這うようにしてようやく家に戻り、瀕死の状態でベッドに



横になったまま、神が自分の所業を罰したのだと悟る。そこで彼は王妃の聴罪司祭と友人の司教に渡してあった弾劾書を取り戻し、妻にそれらを燃やすよう命じたという。それから妻の聴罪司祭だったサングラン（前出）を呼びに行かせ、罪を告白して神の赦しを乞うのだった。そして床についてから40日目、快癒した彼はポール＝ロワイヤルに赴いて神に感謝の祈りを捧げたという<sup>(30)</sup>。

医師たちから不治と宣告された病が祈りや献身によって快癒する現象を奇蹟と呼ぶなら、はたしてこれが奇蹟なのかどうか疑問なしとしない。記述自体、リシェの快癒から1世紀以上経っており、史実性も疑わしい。そして何よりも著者（匿名）のジェローム・ブゾワニュ（1686－1763）はジャンセニストの聖職者で、後述の大教勅「ユニゲニトゥス」の反対派だった。それゆえ、1718年に取得したソルボンヌの博士号を抹消され、29年にはパリから追放処分にあつてもいる。とすれば、どこまで客観性を帯びた記述なのか。それもまた問わなければならないだろうが<sup>(31)</sup>、このリシェは、やがて弁護士を廃業し、ポール＝ロワイヤルに移ってソリテールとなり、長いあいだ過水症で苦しんだのち、1659年、47歳で没している<sup>(32)</sup>。『ポール＝ロワイヤル史』全6巻という大著を編んだブゾワニュを信じれば、稀有な事例ではあるものの、こうしてポール＝ロワイヤルの奇蹟<sup>(33)</sup>は敵対勢力をも引き寄せたことになる。

さらに1662年には、またしても新たな奇蹟が起きる。修練女だったカトリヌ・ド・サント＝シュザンヌ（1636－86）が、1662年、2年前からリウマチで動かなくなっていた両足の自由を、9日間祈祷のあとで取り戻したというのである<sup>(34)</sup>。彼女の父親は、パリのポール＝ロワイヤル、のちにデ・シャンの専属画家となったフィリップ・ド・シャンパーニュ（1602－74）。この奇蹟に対する医師たちの正式な検証はなされていないが、シャンパーニュはその感謝の印として、エクス＝ヴォト（奉納画）<sup>(35)</sup>を制作している。現在ルーヴル美術館に展示されているのがそれだが、そこには椅子に身を横たえたカトリヌの前で、かすかな神の光を浴びながら祈りを捧げるメール・アニエスの姿が印象的に描かれている<sup>(36)</sup>（図10）。父親にとって、愛娘の快癒はまさに奇蹟以外の何ものでもなかった。だが、こうした奇蹟も圧倒的な力で押し寄せる大波に抗することはできな



図10 メール・アニエス（左）とカトリヌ・ド・サント＝シュザンヌ（右）。シャンパーニュ作、1662年。ルーヴル美術館蔵

かった。

### デ・シャン修道院の最期

1661年2月、聖職者会議が改めて「クム・オカジオーネ」の受け入れを決め、「信仰宣誓書」（フォルミュレール）を定める。これを受けて、マザランが没して1ヶ月後の4月、ルイ14世が国务諮問会議でこれを決定し、王国内の修道士や修道女を含むすべての聖職者にそれへの署名を強制する。その信仰宣誓書の内容は以下の通りだった。

私は教皇イノケンティウス10世が1653年5月31日に出し、1656年10月16日にアレクサンデル7世の教勅によって決定された教勅に真摯に同意します。私はこれらの教勅に従うことを明確に認め、コルネリウス・ジャンセニウス（ヤンセニウス）の書『アウグスティヌス』のなかに含まれている、そして、前記2教皇や司教たちによって断罪された5命題をすべて弾劾します。この考えは聖アウグスティヌスのものではなく、神聖な教義の真の意味をジャンセニウスが誤って説明したものであるためであります<sup>(37)</sup>。

当然のことながら、この宣誓書を認めることは、ジャンセニストとしてのアイデンティティを放棄することを意味した。それが教皇＝国王＝聖職者会議の狙いだった。こうして以後、この署名強制はジャンセニスト迫害のための強力な踏み絵となる。さらに国王はジャンセニズムの「敬虔で個人主義的な信仰」が反王権的だとして弾圧し、1679年には、その本拠であったポール＝ロワイヤル修道院から、署名

に抵抗していた修道女を含む40人あまりのジャンセニストを追放してしまう。

そして、フランス国王軍がスペイン領ネーデルラントのラミーユでイングランド軍に敗北した1705年、かねてよりジャンセニスムを壊滅させよとしていたルイ14世は、ガリカニスムをかなぐり捨てて教皇クレメンス11世と交渉し、ポール＝ロワイヤルの聖職者や修道女たちを追放するとの教勅を出させる。明らかにこれはクレメンス9世による「教会の平和」を反故にする措置だった。そして、1700年からデ・シャン修道院の最後の院長をつとめていたエリザバト・ド・サン＝タンヌが没した1706年、同修道院は国務院の採決によって新たな修練女の受け入れを再び禁じられ、翌年、王令によって「ポール＝ロワイヤル・デ・シャン修道院」の資格が取り消される。こうして1708年、デ・シャンはいよいよ最大の危機を迎える。この年の3月、教皇は修道女たちにデ・シャンの教会と修道院の利用を認めた。ところが、ルイ14世がこれに異議を申し立てた結果、ついに9月、デ・シャンを廃止する2度目の教勅を出すに至った。11月には同様の趣旨が記された国王の公開状も出される。パリの高等法院はこの教勅と公開状を正式に登録した。

そして未曾有の厳冬で、フランス各地で多くの餓死者がでた1709年の7月、ジャンセニストに好意的だったノアイユ大司教は、国王の圧力によってデ・シャン修道院の閉鎖に同意し、その財産をパリのポール＝ロワイヤルに移管させる決定を下す。これを受けて、10月1日、後者の女子修道院長だったマダム・シャトー＝レノーがデ・シャンを訪れる。だが、当然のことながら修道女たちは自分たちが選挙で選んでいない彼女を歓迎せず、修道院長と認めることすら拒んだ。シャトー＝レノーはこれを国務院に報告し、改めて自分の地位を確認してもらう。そして10月26日、国務院はついにデ・シャンからの修道女の追放を最終的に決定する。この決定によって登場するのが、2代目のパリ警察総代官だったダルジャンソン侯マルク＝ルネ・ド・ヴォワイエド・ポルミ（1652－21）である。この人物については、拙著『英雄の表徴』を参照してもらいたい。彼はノアイユの許可のもと、10月29日にデ・シャン修道院に踏み込み、修道立願者15人と助修女7人を捕えて馬車に乗せ、追放地へ連行した。翌日は、病人のた

めひとり残された最後の修道女も、担架に乗せられてパリ西方のマントに送られた。

1710年1月、国務院はデ・シャン修道院の解体とともに、他の建物の競売を決定する。そこには次のように書かれていたという。

国務院においてすべてを熟慮された国王は、ポール＝ロワイヤル・デ・シャン修道院を構成する建物を、囲いの内側のみならず外側にあるものも含めて、ただちに解体するよう命じられた。ただし、教会ないし礼拝堂付き司祭およびパリのポール＝ロワイヤルによって設けられる小作人ないし庭園師のための住宅を除くものとする<sup>(38)</sup>。

この決定により、1710年5月、デ・シャンの施設は競売にかけられ、安すぎると嘆くポール＝ロワイヤル女子修道院長の不承不承の承認をとりつけて、4700リーヴルで落札される。落札者はオルレアンの建物施工業者だった。デ・シャン修道院の解体工事はただちにかつ休みなく行われた。翌年末までには、デ・シャンに埋葬されていた引き取り手のない3000体あまりの遺骸が掘り出され、ヴェルサイユ近郊のサン＝ランベール小教区にあった共同墓穴に入れられた。そして、前述した教勅「ウニゲニトゥス」が出された1713年、修道院自体と囲壁も爆破される。こうしてデ・シャン修道院は、その輝かしい歴史を閉じて廃墟となっていくのだった。1714年、のちに助祭パリス伝を編むことになるピエール・ボワイエ（後出）と、オラトリオ会出身のジャンセニスト司祭で、破壊寸前のデ・シャン修道院で最後のミサをあげたジャン＝バティスト・ル・セヌ・ド・メニユ・デトゥマール、通称デトゥマール司祭（1682－1770）<sup>(39)</sup>は、共著『ポール＝ロワイヤル・デ・シャンの聖なる修道院の破壊に強く心を揺さぶられたある魂の第1の呻吟』（第3版、1719年）において、次のように記している。

主よ、あなたの乙女たちの聖なる集団が連れ去られたあとでも、人間の敵はなおも彼女たちが住んでいた聖地を憎んでいました。彼らはきわめて神聖な足が立ち止まった場所まで徹底的に破壊しようとしたのです。《主よ、覚えていてください／エドムの子らを／エルサレムのあの日を／彼ら

がこう言ったのを／「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで」(旧約聖書『詩篇137』)。それゆえ、あなたがご自身の聖なる栄光を輝かせるのは、もはやこの家(修道院)ではありません。あなたの溢れんばかりの恩寵に恍惚と酔いしれ、聖なる道と呼ばれていた道を見ていたこの幽処、あなたがもっとも愛おしむ者の心に話しかけようとされる幽処は、かつてそうであったように、暗くおぞましい砂漠と化したのです。死すべき体をまとったこれら天使たちの代わりに、そこで聞こえてくるのは、もはや恐ろしい獣たちの叫び声だけです。嗚呼、わが主よ、多くの高名な人々を引きつけた、きわめて貴重かつ尊敬に値すべきこれら偉大な建物、偉大な記念物は、今では醜い灰塵の集まりにすぎなくなっているのです<sup>(40)</sup>。

『詩篇』の一文を引用しながら、デ・シャンを見捨てられたエルサレムになぞらえ、破壊者たちを人間の敵＝獣と見立てる。こうしたレトリックはしばしば護教文学にみられる常套手段だが、たしかにこの『呻吟』は、デ・シャンの修道女をはじめとする関係者の怒りと諦めを代弁したものといえる。だが、それは単なる修道院の解体ではなかった。フランス・ジャンセニズムの拠点として清貧と無私・無欲を教示とし、ときに教皇や国王の意志に逆ってまで、神の真理を求めて祈りと苦行に明け暮れた紛れもない宗教共同体の解体であり、当時の知性を代表するソリテールたちによる教育機関の、さらに有力者たちの庇護や支援を受けながら、周辺住民に対する施物や治療行為も行った一種の慈善組織の解体でもあった。一方、パリのポール＝ロワイヤル修道院は聖母訪問会に帰属し、革命期までなんとか永らえるが、すでにして体制に抵抗する気風を失い、独自の文化を生み出した過去の輝きとも絶縁したその余命は、いかなる奇蹟からも見放された、いわば残照にも似たものだった。

### おわりに——奇蹟の文法

かつてヴォルテールは、1734年から37年までフランスに滞在し、中西部ラ・フレーシュのイエズス会士たちと親交を結んだこともあるデーヴィッド・ヒューム(1711-76)に倣って、「奇蹟とは数学的法則や、神聖かつ普遍・永遠的法則に対する冒涇で

ある」<sup>(41)</sup>と言いつけている。さらに、神が創った法則を神が奇蹟によって冒すという論理的矛盾すら指摘している。パスカルやラシーヌを厳しく批判し、奇蹟を総じて非近代的な胡散臭いものと弾じて憚らなかったこの啓蒙思想家は、しかし明らかに奇蹟の多様性をみようとしていない。こと快癒奇蹟に関して言えば、たとえばキリスト教最大の奇蹟者であるイエスの事例を引くまでもなく、ポール＝ロワイヤルの事例にみられるように、奇蹟がしばしば社会的緊張、つまり加虐と被虐の社会的文脈のなかで、弱者＝病者のあえかなる救いの願望として生まれてきたメカニズムを明らかに看過しているのだ。加虐の論理から奇蹟が生まれなかった所以がここにある。さらに、奇蹟がすぐれて民衆的なメシアニズムの表象としてあることにも、おそらく彼は気づいていなかった<sup>(42)</sup>。

キリスト教が夥しい奇蹟譚とそれを演出した聖人たちが民衆の伝承を基盤として発展したことは改めて指摘するまでもないが、少なくともしかじかの快癒奇蹟が社会的・歴史的な出来事として成立する基本的な要件としては、奇蹟体験者(A)と証人ないし目撃者(B)、および評価者ないし認定者(C)の存在がある。ありていにいえば、この「奇蹟のトリアド」において、奇蹟を「創出」するのはAやBではなく、むしろしばしば権力側に身を置くCだと断じてよい。前二者がいくら奇蹟と言いつけても、最終的にCがそれを認めない限り、奇蹟は単なる偶然的な出来事として葬り去られてしまう。

もとより治療といっても刺絡や瀉血がせいぜいだった17・18世紀の医術では、「不治の病」でもいっしょに快癒する、つまり奇蹟的快癒が自然的快癒だったこともあったろう。だが、当事者はそれを「奇蹟」と信じて疑わなかった。第3項としてのCの存在が大きな意味を有していた所以である。だが、このトリアドでもっとも重要なのは、奇蹟が教皇の代理者としての司教の絶対的な権威のもとに置かれなければならない、つまり奇蹟をして司教とカトリック教会の権威の発露とする論理なのである。それはまた、神意によって起きるはずの奇蹟を司教＝教会が検閲することをも意味する。トリエント公会議の裁決(前出)はまさにその論理を顕在化させたものといえる。とすれば、マルグリト・ペリエたち(や「パリス現象」)の一連の奇蹟は、単にジャンセニス



トとイエズス会士たちとの角逐という文脈に回収させるだけでなく、結果的にそれらが教会当局に対する異議申し立てや抵抗の表象となったという、社会的意味もしくはイマジネール（集団的想像力）も見逃してはならないだろう。その限りにおいて、ポール＝ロワイヤル修道院は、「奇蹟＝抵抗」というもうひとつの文法も創出したといえる。むしろそれは、ソリテールたちによって生み出された「ポール＝ロワイヤル文法」とはかなり様相を異にする文法ではある。

## 註

(欧文イタリック体は論文。凡例：BNFフランス国立図書館、BHVPパリ市立歴史図書館)

1. 改めて指摘するまでもなく、ジャンセニスムとはルーヴァン大学の人文学者・神学者だった、ミシェル・ド・ベ (Michel De Bay)、通称バイウス (Baius, 1513–89) の流れを汲むとされるネーデルラントの神学者で、イーブルの司教コルネリウス・ヤンセンないしヤンセニウス (Coenerius Jansen, Jansenius, 1585–1638) を創唱者とする神学思想である。バイウスはアウグスティヌスの恩寵論を再解釈して、原罪以前の人間は苦しみや死、無知とは無縁で、天国へ向かうことが予め定められていたが、原罪以後、神の恩寵なしでなされる人間のあらゆる行為は、たとえそれが自由意志に基づくものであっても罪を犯すことにほかならないと説いた (Albert Vanneste : *De prima hominis iustitia de M. Baius. Une relecture critique*, in *L'Augustinisme à l'ancienne faculté de Théologie de Louvain*, éd. M. Lamberigts, Louvain, 1994, p. 123-166)。ヤンセンもまた死後刊行 (1640年) になる『アウグスティヌス—人間の本性の健全さについて』において、創造の完璧さと原罪に続く人間の悲劇的で罪深い状態との対比、墮落した人間の神からの疎外強調、予定説ゆえの人間の自由意志の否定などを説いている。17・18世紀以降のフランス・キリスト教会は、まさにこのジャンセニスムの登場と展開を契機として大きく揺れ動くことになる。ちなみに、ジャンセニスムに関しては我が国にも膨大な研究の蓄積があるが、そのなかでも飯塚勝久氏の『フランス・ジャンセニスムの精神的的研究』(未来社、1984年) は、管見によれば世界的な水準にある。
2. このジャンセニスト (Janseniste) という語は、1641年に初出しているが (Monique Cottret : *Jansénisme*, in Lucien Bély, dir. : *Dictionnaire de l'Ancien Régime*, PUF, Paris, 1996, p. 684)、ジャンセニズムと同様、反ジャンセニスム側 (とくにイエズス会) が作り出した蔑称だったという (野呂康「サン＝シランの残像—論争における操作とその展開」、《大学教育研究所紀要》、第10号、2014年、2–3頁参照)。とすれば、のちにジャンセニストたちはこの「蔑称」を自称することになる。いささか間尺に合わない話である。
3. この人物については、岡崎敦「パリにおける教会非訟事項裁知権と司教代理判事制度の生成 (13世紀はじめ)」(《史淵》、第150輯、九州大学大学院人文科学研究院、2013年、95–128頁) を参照されたい。
4. A. GAZIER : *Port-Royal des Champs*, Lib. Plon, Paris, 1952, p. 8.
5. Angélique de Saint-Jean Arnauld d'Andilly : *Relations sur le vie de la révérende Mère Angélique de Sainte-Arnauld*, 1737, p. 3. BNF., NUMM-6527696.
6. Philippe Sellier : *Un lieu de mémoire*, in *Chroniques de Port-Royal*, Paris, 2004, p. 17
7. Jean Lesaulnier : *Chronologie de Port-Royal des Champs*, in *Chroniques de Port-Royal*, ibd., p. 18.
8. 詳細は *Relations sur la vie de Mère Angélique de Sainte Magdeleine Arnauld*, s. l., 1737, p. 33, BNF. NUMU-6527696、また近年上梓された Jean Lesaulnier : *Images de Port-Royal*, Nolin, Paris, 2002, pp. 198-199などを参照されたい。
9. サン＝シランの詳細な経歴については、たとえば水野豊「サン・シランの生涯」(*Journal of College of International Studies*, 2, 中部大学、1986年、113–269頁) を参照されたい。
10. Louis COGNET : *Les Petites-Écoles de Port-Royal*, in *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, no. 3-5, 1953, p. 20.

11. この新たな校舎はルイ13世様式の正面を有する3階建てで、寄宿生20人のための部屋（教師役のソリテールたちは別棟に住んだ）や2つの明るいホール、さらに植物学者でもあったダンディイが設けた果樹園を備えていた。
12. ラシーヌのその後を決定した最初期の悲劇『ラ・テバードまたは兄弟は敵同士』（5幕、1664年）は、デ・シャンでの孤独な生活から生まれとされる。
13. 国府田武「ジャンセニウスの〈五命題〉の断罪——勅書“Cum occasione”」、《ノートルダム清心女子大紀要・文化学編》、vol. 9, no. 1、通巻20号、1985年、29—32頁。なお、この国府田論文は「クム・オカジオーネ」の成立までの経緯をきわめて丹念に後づけた力作である。
14. エメ＝ジョルジュ・マルティモールによれば、このガリカニスム（Gallicanisme）という語は1870年の第1ヴァチカン公会議で市民権を得ているが、その思想は実際にはすでに旧体制時代から存在していたという（『ガリカニスム』、朝倉剛・羽賀賢二訳、白水社クセジュ文庫、1987年、7頁）。
15. この経緯に関する詳細は、たとえば御園敬介「フランスにおける反ジャンセニスム政策の形成——一六五四年九月の教皇インノケンティウス十世の小勅書Ex litterisをめぐって」（《一橋社会科学》、第3号、2007年、149—174頁）を参照されたい。
16. この出来事の背景とソルボンヌ神学部の党派構成の詳細については、たとえばJacques M. Gres-Gayer : *La Jansénisme en Sorbonne*, Klincksierck, Paris, 1996, pp. 240-282を参照されたい。
17. Nicola Le Gros : *Abrégé chronologique des principaux événements qui ont précédé la Constitution Unigenitus, qui y ont donné lieu, ou qui en font les suites*, s.l., 1732, p. 19. BNF., B-LD3-134. ただし、面妖なことにル・グロはこの奇蹟が1655年3月5日に起きたとしている。
18. ジャン・ラシーヌ『ポール＝ロワイヤル略史』、金光仁三郎訳、審美社、1989年、67頁。
19. Nicolas Fontaine : *Mémoires ou histoire des solitaires de Port-Royal*, éd. par Pascal Mengotti-Thouvenin, Champion, Paris, 2001, p. 654.
20. ラシーヌ、前掲書、70—71頁。なお、ペリエの奇蹟とその意味に関しては、塩川徹也『パスカル奇蹟と表徴』岩波書店、1985年を参照されたい。
21. Laurence Plazenet : *Port-Royal*, Flammarion, Paris, 2012, p. 114.
22. 興味深いことに、エディンバラ出身のデイヴィッド・ヒューム（1711—76）は1748年に『人間悟性論』を上梓し、その第10章「奇蹟」において、ペリエ（F版原注）と、パリのサン＝メダール教会助祭で、ジャンセニストだったフランソワ・ド・パリス（註42参照）の奇蹟について論じている。その口調は著しく異なっている。たとえば前者について、彼はポール＝ロワイヤルを高く評価し、その「尼僧達の厳格さは、全ヨーロッパを通じて非常に著名であった」とし、「疑う余地のない信頼に値する」多数の尼僧や僧侶（これらの訳語はいうまでもなく仏教用語であり、不適である—引用者注）、医者および世俗人たち全員が、あらゆる証拠によってこの奇蹟を強固なものにしていると指摘する。さらに、パスカルやラシーヌらの「偉大な名前」をあげながら、「その奇蹟は、神聖な茨の真正銘の神聖な棘にふれることにより現実に行われた」ともしている（デイヴィッド・ヒューム『奇蹟論・迷信論・自殺論』、福鎌忠恕・斎藤繁雄訳、法政大学出版局、1985年、33—34頁）。
23. *Lettres, opuscules et mémoires*, éd. par M. P. Faugère, Auguste Vaton, Paris, 1845, p. 155.
24. Robert Arnauld d'Andilly : *Mémoires*, éd. par Régine Pouzet, Honoré Champion, Paris, 2008, pp. 320-321（引用文中、傍点は蔵持）。この奇蹟の信憑性については、より後代のサント＝ブーヴ（1804—69）もこう書いている。「だが、奇蹟の信憑性は間違いないところである。もっとも権威のある医師たちは、4月14日（聖金曜日）に作成した証明書のなかで明示している。彼らによれば、自然の通常の力を越えたこうした治癒は、積極的な人びとをひたすら神秘につくよう掻き立てた。世論が声を発し、さまざまな情報が順当な手続きを踏んで形づくられた。パリの司教総代理だったデュ・ソーセ氏は、かなりの疑いを抱きながら修道院を訪れたが、自らが記録したこの治癒を目の当たりにして、その疑いを変えなければな

- らなかった。1656年10月22日、もうひとりの司教総代理オデンク氏は、当時遍歴していた司教レッツの名で、厳粛に所見をもって奇蹟を認め、テ・デウムが挙行された。フォブールの住民たちは陸続と教会につめかけ、瀕死の貴族たちは人を遣って聖遺物の奇蹟にすがった。こうして聖荊による奇蹟と治癒はひと月もしないうちに14例にまで増え、さらに80例にまでにのぼった。(・・・) 一方、最初の奇蹟は医学や教会の権威によって事実と認定された。イエズス会士たちもそれを否定するより解釈しようと考え、最終的に悪魔がそれを行ったと言わざるをえなくなった」(Sainte-Beuve : Port-Royal, 3e éd., t. I, texte présenté et annoté par Maxime Leroy, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1952, p. 183)。
25. François Annat : La bonne foy des Jansenistes en la citation des auteurs, reconnue dans les lettres que le secetaire du Port-Royal a fait courir depuis Pasques, Chez Florentin Lambert, Paris, 1656, p. 8, BNF. D-4406.
  26. Ibid. : Défence de la vérité catholique touchant les miracles, contre les déguisemens et artifices de la response faite par MM. de Port-Royal, à un escrit intitulé : “Observations nécessaire sur ce qu’ on dit estre arrivé à Port-Royal au sujet de la Sainte Espine”, p. 18, BNF., NUMM-6529209, なお、アンナとパスカルの論争については、内田甫著『パスカル「プロヴァンシャルの手紙」』(関西大学出版会、2000年、第3節)を参照されたい。
  27. 『ポール＝ロワイヤル年代記』によれば、パスカルは1655年から59年にかけて、合計2ヶ月ほどデ・シャン修道院に滞在したという(Chronique de Port-Royal, no. 2, Bibliothèque Mazarine, Paris, 1951, pp. 27-28)。
  28. アンナへの批判は『プロヴァンシャル』(『パスカル著作集IV』、田辺保訳、教文館、1980年)の第17の手紙にある。
  29. 『プロヴァンシャル』第16の手紙。パスカルはまた、死の7年後に刊行された『パンセ』(1669年)の第13章(奇蹟)のなかで、偽りの奇蹟があるのは、真の奇蹟があるからで、真の宗教があるから偽りの宗教もあるという一種の弁証法を語り、そのあとでこう記している。「ここに一つの聖なる遺物がある。ここにこの世の君主の権力もおよぼぬ救い主の荊の冠の一部がある。その荊がわれわれのために流されたあの血潮の特別な力によって、奇蹟を行なったのだ。いまや神は親しくこの家を選び、そこで彼の力を現されたのだ」(『パスカル全集第3巻』、松浪信三郎訳、人文書院、1959年554-555頁)。この一文が姪の奇蹟と一族のことを指していることは言を俟つまい。
  30. Jérôme Besoigne : Histoire de l’Abbaye de Port-Royal, t. I, Aux dépens de la Compagnie, Cologne, 1752, pp. 387-389, BHVP., Fonds Jules Cousin -6771.
  31. ただし、パリとデ・シャンの修道院が迫害を受けるようになる1661年4月の時点で、たしかに修道女志願者としてリシェの娘マルグリトの名がリストに載っている(Pierre Leclerc : Histoire des persécutions des religieuses de Port-Royal, Aux dépens de la Société, Ville-Franche, 1753, p. XIII)。また、宗教史家のジャン＝ルイ・カンタンによれば、当時「リュイヌ公の執事」リシェの妻は「グランド＝ジャンセニスト」を呼ばれていたという(Jean-Louis Quantin : *Augustinisme, sexualité et direction de conscience. Port-Royal devant les tentations du Duc de Luynes*, in *Revue de l’histoire des religions*, vol. 220, no. 2, 2003, p. 192)。
  32. Besoigne, op. cit., p. 398.
  33. たとえば、明確な年代は不明だが、マリ・デ・ザンジュ・ド・フという修道女が、薪を集めに行った際、転倒して薪束の下敷きとなり、脳震盪を起こして以来激しい頭痛に襲われるようになったが、メール・アンジェリクの祈りによって全快したという(Relations..., op. cit., pp.143-145)。なお、彼女の生涯に関しては、Fabian Gastellier : Angélique Arnauld, Fayard, Paris, 1998などを参照されたい。
  34. Lettres de la Mère Agnès Arnauld, abbesse de Port-Royal, t. II, éd. par P. Faugère, Benjamin Dupat, Paris, 1858, pp. 31-34.
  35. エクス＝ヴォトに関する詳細な研究は、たとえば松平俊久・蔵持不三也「民衆造形文化論」(『ヨー



- ロッパ民衆文化の想像力』所収、言叢社、2014年、119-237頁）を参照されたい。
36. 紙幅の制約でこの奉納画の分析は控えなければならないが、詳細はLouis Martin : *Signes et représentation. Philippe de Champaigne et Port-Royal*, in *Annale E.S.C.*, vol. 25, no. 1, 1970, pp. 1-29や、Bernard Dorival : *L'ex-voto de 1662 de Philippe de Champaigne*, Bibliothèque électronique de Port-Royal, 2007, pp. 1-15などを参照されたい。ちなみに、この奉納画は一時パリ大司教ノアイユの手元にあった。
  37. Christine Gouzi & Philippe Luez : *Port-Royal ou l'abbaye de papier*, Yvelin Édition, Magny-et-Hameau, 2011, p. 14.
  38. Aimé Richardt : *Le Jansénisme de Jansénius à la mort de Louis XIV*, François-Xavier de Guibert, Paris, 2002, p. 85.
  39. この司祭は1725年にローマに赴き、ベネディクトゥス8世とフランス全土の上訴派聖職者との和解を働きかけている。帰国後、ジャンセニストたちに好意的だったケリュコ教のいるオーセール司教区に定住し、各地のジャンセニストたちと夥しい数の交信をしたことでも知られる。
  40. Pierre Boyer & Jean-Baptiste Le Sesne de Ménilles d'Etemare : *Second Gémissement d'une âme vivement touchée de la destruction du Monastère de Port-Royal des Champs*, 3e éd., 1719, pp. 5-6, BNF. 8-Z LE SENNE- 9159. なお、この書の共著者であるボワイエは、1931年に『助祭パリスの生涯』を著している。
  41. Voltaire : *Dictionnaire philosophique*, Imprimerie Nationale, Paris, 1769 / 1994, p. 363. ちなみに、フランス最初期の辞書編纂者であるピエール・リシュレ (1626-98) の『古・現代フランス語辞典』（死後刊行）には、「奇蹟」について以下のような説明がなされている。「自然の力を凌駕し、神によって、ときには聖人によってなされるもの。（・・・）奇蹟はそれ自体で作動する第一原因によって自然の秩序を混乱させる」（Pierre Richelet : *Dictionnaire de la langue françoise, ancienne et moderne*, Les Frères Duplain, Lyon, 1759, p. 644）。
  42. たとえば1727年5月に、パリの下町ムフタル街のサン＝メダール教会で助祭をつとめていた、ジャンセニスト＝上訴派のフランソワ・ド・パリスが37歳で他界したのち、彼の墓で、さらに国王の命で1729年2月に墓地が閉鎖されると、その教会で、1728年から35年にかけて夥しい数——公証人の作成になる奇蹟報告書だけでも210例（！）——の快癒奇蹟が生まれている。名門法曹家に生まれながら、生前ソリテールをモデルとして世俗を離れ、苦行と貧民たちへの奉仕に明け暮れ、それがために命を縮めたこの高潔な聖職者のとりなしによって、である。詳細は拙著『奇跡と痙攣』（近刊）に譲るが、これら奇蹟体験者のほとんどは一般民衆だった。ちなみに、この助祭の墓地が閉鎖されて3年後の1732年2月のある日、今は撤去されている墓地の入り口に、その閉鎖を揶揄するこのような張り紙が貼られた。「王命により、神がこの場所で奇蹟をなすことを禁ずる」（*Reflexions sur l'Ordonance du Roy, en date du 27.Janvier 1732 qui ordonne que la Porte du petit Cimetière de la Paroisse de S. Medard sera & demeura fermée, & sur les Procès-verbaux de plusieurs Medecins & Chirurgiens, qui sont le fondement de cette ordonnance; & sur évenemens qui en sont la suite*. BHVP, 102767, pp. 2-3）。